# おためし・漢字おもしろ講座

## ≪第２回講義に関連する質問＆解答≫

Ｑ１　「十干・十二支」良くわかりました。とても面白かったです。覚えたいです。「えと」の箇所、もう少し説明して欲しいです。

Ａ１：感想ありがとうございます。ご質問の趣旨は、資料 P8「えとの読みは陰陽五行説から」と記した箇所をもう少し説明して欲しいとの趣旨と受け止めました。再度、詳細に説明することで解答とさせて頂きます。

　まず、「陰陽説」は、万物のすべては「陽」と「陰」の２つの要素に分けられるとする古代中国の思想で、「太陽と月」、「天と地」、「表と裏」、「上と下」などがその例とされています。この関係を日本では、「陽」を年上の「兄（え）」、「陰」を年下の「弟（と）」に見たてたものです。

　一方、「五行説」は、万物のすべては「木・火・土・金・水」の５つの要素で成り立っているとする同じく古代中国の思想ですが、のちに「陰陽説」と合わさって「陰陽五行説」となり、日本では、十干の「甲」を「木の兄（きのえ）」、次の「乙」を「木の弟（きのと）」、続けて「丙」を「火の兄（ひのえ）」、「丁」を「火の弟（ひのと）」（以下「戊・己・庚・辛・壬・癸」は資料 P8 記載のため省略）と、呼ぶようになったということです。

　「えと」の読みはこれが由来とされており、また、「えと」という場合は、十干十二支を組み合わせた「干支（かんし、えと）」を指すことばとされています。

Ｑ２　「六書」の文字が知りたい（六書のどれか１つ）

Ａ２： 資料P15に「象形」の例として「山、川」、「指事」の例「上、下」、「会意」の例「立」、「形声」の例「河」、「仮借」の例「我」、「転注」の例「老、考」を記しております。

なお、六書とは、これら「象形、指事、会意、形声、仮借、転注」を総称した名称で、書という字がついていますが、六つの方法という意味ですので、ご理解を頂きたいと思います。

Ｑ３　マヤ文字の文献や参考書などありましたら教えて下さい。

Ａ３：ネットで調べると、「八杉佳穂」氏の著書が幾つかヒットしましたが、品切れ、在庫なしなどで購入が難しいものがありました。

また、電子書籍になりますが、同氏の著書「マヤ文字を解く」（中央公論新社）については、「ヨドバシ．COM」、「アマゾン」で、手に入れることは可能な状態であることは確認できました。

ただ、私の勉強不足でマヤ文字に関する専門の本は読んだことがないので、本の内容やおすすめという点では、残念ながら、アドバイスできかねます。申し訳ありませんが、ご自身で、確認などお願いしたいと思います。

Ｑ４　肺や腸、内臓の臓の部首は「月」なのでしょうか？

Ａ４：「月」を含む漢字には、「つきへん」、「にくづき」、「ふなづき」の３つのタイプがあり、成り立ちの違いで、戦後まもない頃までは、以下の使い分けがありました。

「つきへん」は時間に関するもの（横二本線の右が離れている形）。

「にくづき」は体に関するもの（横二本線が両側にくっつく形）。

「ふなづき」は舟（盤）に関するもの（２つの点の形）。

今は、字形の簡略化が進み、すべて同じ「月」の字形で表されていますが、成り立ち、以前の使い分けから言えば、ご質問の「肺、腸、臓」は体に関するものなので、部首としては「にくづき」になります。

Ｑ５　世界には漢字以外に字そのものに意味がある文字はあるのでしょうか？

Ａ５：文字体系の分類は、複雑な面もありますが、簡単に言えば、漢字は一つの文字で意味やことばを表す「表語文字」の代表とされております。この表語文字は、象形文字に起源をもつとされ、エジプトのヒエログリフ、楔形文字も該当するとされますが、ご承知のとおり今は使われていません。

今使われている文字で限定すると、「トンパ文字」が挙げられますが、中国のチベット東部等に住む少数民族ナシ族に伝わる象形文字の一種とされるため、「生きた象形文字」とも言われています。

ただ、このトンパ文字は、宗教関係者間で受け継がれている文字で、一般民衆が使う文字とはなっていません。

このほか、第二次大戦後発明された「ブリスシンボル」と呼ばれる文字があります。これはナチスから迫害を受けたユダヤ人の難民が意思疎通を容易にするために、音声をもたない記号的な文字として開発されたものですが、今では、脳性麻痺などで話せない人々の補助・代替コミュニケーションの手段として注目されるようになっています。

こうした例を除き、一般国民が日常使用する文字で、今も使われている「表語文字」としては、漢字以外はないと理解されて良いかと思います。